中西　啓
Nakanishi　Hiromu

真庭人
MANIWABITO

お客さんと一緒に、自分も楽しみながら

勝山の早春の風物詩になっている、勝山のお雛まつり。その期間中、中央図書館の隣にある城内観光駐車場に入ると、中西啓さんの自宅に飾られたお雛さまを見ることができます。「お客さんと一緒に、自分も楽しみながらやってます」と中西さんは笑います。中西さんは、勝山のお雛まつりが始まってすぐの頃から、お雛さまを飾り始めたそうです。「もともと、お雛まつりは御前酒の辻さんのところが飾り始めたことから始まったんです。先代が同級生だったこともあって、協力しようかな」と飾り始めたとのこと。その後、一気にお雛さまを飾るところが増加。「みんなでしようやという感じで広まっていったんじゃないかな」と教えてくれました。

工夫を凝らしたお雛さま

「最初の頃は、家にあった段飾りのお雛さまを飾っていました。でも何年か経って、ちょっと変わったことをしたいなと思って」。そうして趣味で集めていた骨董品などを利用して飾ってみると、訪れた人からは高評価。それ以来、毎年工夫して飾りつけをしているそうです。

その年の干支をモチーフにした竹の作品も、中西さんの飾りつけの特徴。始まりは、前回の辰年だったそうです。「いびつな形の竹をもらい、ちょうど辰年だったので、形を生かして龍を作ったんです。すると、海外から来ていたお客さんがそれを見て、ワオ、ドラゴンって大喜び。次の年も来てくれて。それで毎年干支を作るようになったんです」。製作するときは、手伝ってくれる仲間がいるそうで、「そういうところも、みんなでつくるお雛まつりっていう感じですよね」と話します。

今後について尋ねると、「楽しみながら、無理しない程度で続けたいと思います。お雛まつりそのものも続いてほしいです。どこもいろいろ工夫して飾ってますから、それを見に来てほしいですね。来てくれたら、お話しましょう」と、お雛さまの華やかさに負けない、素敵な笑顔で話してくれました。

夫婦で温かく迎えてくれます

訪れた人を楽しませる工夫が凝らされた飾り方

中西　啓さん（勝山）

勝山出身。
勝山町役場に勤務し、退職前から勝山のお雛まつりに携わる。趣味は山菜採りと骨董品収集。

まにわびと
41
2023